



## 一条さゆり(俗名・池田和子)を偲ぶ会

2013年8月3日(土)

立ち呑み・難波屋

大阪市西成区萩之茶屋2-5-2(西成警察署を目指す、その50m手前の酒場)

参加費 1ドリンク+投げ銭

開場 16:30

開演 17:00 「谷間の百合」さすらい姉妹(水族館劇場)

18:30 一色凉太(語り部)・牧瀬茜(追悼の辞)・渡辺理緒(献上の舞)

終演 20:00

入れ替え

開演 20:30 「谷間の百合」さすらい姉妹(水族館劇場)

終演 21:30

【問い合わせ】TEL 080-6337-8058 一条さゆりを偲ぶ会(川上譲治)

## きっちゅ魂in難波屋

裸的群像伝  
1975-2006

七十年代後半  
見るストリップから参加する生板へ  
業界は危うい過激路線に揺れた  
その時代  
集団の維持や公演の資金稼ぎの為に  
ストリップの舞台があった  
そこで体を張って青春を  
人生を捧げたもの達の残像である



## 川上譲治写真展

2013年7月22日(月)～8月4日(日)

18:00～閉店 木曜日定休日

## ザ・ストリッパー 堕ちて藍 (16ミリ/1981年)

脚本:山崎哲(劇団・転位21) 監督:後藤和夫(グループ・ポジポジ)・山崎哲  
撮影:篠田昇(「世界の中心で、愛をさけぶ」日本アカデミー賞最優秀撮影賞)  
プロデュース:ジョウジ川上



2013年7月27日(土)

参加費 1ドリンク+カンパ

開場 18:30 上映 19:00 終映 21:00

【問い合わせ】TEL 080-6337-8058 (川上譲治)

# 将棋名人戦

## 序盤じっくり



森内俊之名人(42)の3連覇か、羽生善治三冠(42)の3期ぶりの返り咲きか。9日に開幕した第71期

将棋名人戦七番勝負第一局は、一手一手に時間をかけるじっくりとした序盤戦が続いている。

▼1面参照

午前8時55分、記録係の石田直裕四段が森内名人の歩を5枚取って振り駒をすると、「と金」が3枚出て羽生三冠の先手番と決

内名人も飛車先の歩を突き、戦型は相がかりに進んだ。

副立会人で解説を担当する木村一基八段は「互いに端の歩を突いたあたり、腹の探り合いが続いています。両者の構想力が問われるところで、名人戦らしいゆっくりしたテンポで進むと思います」と話してい

# 8月、大阪

## しのぶ反骨の踊り子

### 一条さゆり考えるシンポ

「反権力の象徴」として語り継がれてきたストリッパー一条さゆり。娯楽か犯罪かをめぐって最高裁まで争った「伝説の踊り子」だ。一条とは、また、彼女が活動した時代とは何だったのか。有志たちによるシンポジウムが、さゆり終焉の地、大阪・釜ヶ崎で8月に開かれる。

呼びかけ人で写真家の川上護治さん(62)は言う。

「大学闘争の嵐が吹き荒れたころで、一条さゆりは全共闘世代やウーマンリブの活動家から、反権力の象徴として祭り上げられた。そんな時代の意味を若い人にも伝えたいという。川上さんは、東京・新宿にあったストリップ劇場の元興行師。

ここ数年は島根県浜田市の自宅から大阪に通い、一泊1300円の簡易宿泊所に住み込み、釜ヶ崎を撮り続けてきた。2011年8月、釜ヶ崎で開かれた合同慰霊祭を取材してきた。遺骨の引き取り手がなく無縁仏となった野宿労働者たちの名前が会場の一角に掲げられ、焼香台が設けられた。

「『ああ、あいつも死んだのか』とため息をつく人たちの姿を見ているうち、一条のことが脳裏に浮かんできたんです」。今年8月3日が一条の十七回忌となるのにあわせ、シンポジウムを企画した。

ルポライター伊藤裕作さん(63)は言う。

「一条が釜ヶ崎に落ち着いたのは『過去を捨てて生きていけそうな街』と思ったからだろう。出棺時、労働者たちから『さゆりちゃん、おおきに』『天国行っても俺ら楽しんでや』と声がかかったそうです」

シンポジウムは8月3日午後6時半から、大阪市西成区萩之茶屋2丁目の酒場「難波屋」で十七回忌法要、舞踊ショー「谷間の百合」、一条の引退興行に立ちあがった舞台役者・一色涼太さんの語りもある。問い合わせは川上さん(080-633378058)。(編集委員・小泉信一)



一条さゆり

現役のころの一条さゆりさん「ニッポン裸舞界」(インテリジェンス社)から、川上護治さん提供



本名・池田和子。1937年生まれ、埼玉県育ち。50年代後半にデビュー。作家・駒田信二の小説「一条さゆりの性」で人気に火がつき、「ストリップの女王」と称賛された。72年、大阪・吉野ミュージックでの引退興行中に公然わいせつ容疑で現行犯逮捕。最高裁まで争ったが、懲役刑が確定。88年、大阪・釜ヶ崎の酒場で働いていたとき、交際の男性にガソリンをかけられ大やけどを負う。生活保護を受けながら釜ヶ崎解放会館の3畳一間で暮らす。97年8月3日、肝硬変のため60歳で死去。

一回のステージと二回の出会い

新劇の「俳優」と云われるより「役者」として生きたいと、浅草軽演劇からストリップの幕間芝居、そしてキャバレーのフロアーショーと放浪を続けている最中の1972年のゴールデン、大阪野田阪神駅前の「吉野ミュージック」というストリップ劇場に出くわした。表の看板を見ると「一条さゆり」の名がデカデカと記されている。偶然とはいえ噂に聞いていた一条さゆりのステージがこんな所で、しかも引退興行、おまけに東京ではついぞお目にかかれない「特出し」……。吸い寄せられるように入ってしまった木戸口、開演までに一時間以上も有るというのに場内は超満員。大トリだろうから一条がステージに現れるのは早くて三時間後、胸をワクワクさせながらこのラッキーな出会いを待ち望んだ。すべての踊り娘さんのステージが終わり愈々一条さゆりの登場、一曲目着物姿での踊り、今という新舞踊か？しかし真剣な踊りっぷりの割には踊りそのものは今一垢抜けないという印象だが、後日日活ロマンポルノ映画「濡れた欲情」を観てそのセンスの良さに記憶違いだったようだ改めて脱帽。何せ40年前の印象だからご容赦願いたし。そして二曲目からのベッドイン、オナニーショー、一曲の進行に連れて速くなる手の動き、呼応して激しさを増す喘ぎ声、ピンクの襷、完璧に性の虜になっている一条、冷静さなど微塵も感じられない、その官能に浸りきった喘ぎ声の襷を聞き漏らすまいと水を打ったような静けさの場内、まるで一条の子宮に二百人ほどの客が飲み込まれてしまったような一体感。やがて愛液にまみれ官能にうち震わせながらやっとの思いでローソクに手を伸ばす。待つてましたとばかりに火をつける客、乳房に向けて一垂らしする一条、見る見るうちに築き上げられる蠟のかさぶたと官能の叫び！狂ってる！狂ってる！本気に狂ってる！性の奴隷を自身で創り上げている。こんな女がこの世にいるなんて……。誰もが一条に釘付け。やがて天にも昇るような官能の絶叫！激しく波打つ乳房、腹、収縮を繰り返すピンクの襷、握力が抜け舞台上に落ちるローソク、優しく火を消す客、失神してしまったのか微動だにしない一条、固唾を飲む客、確かに目の前には女の裸体があるのだけれども舞台上の感動に酔いしれてむしろ一条の心意気を労わっている。誰もが感謝、感謝の視線。どのくらい時間がたったのだろうか、やっとの思いでおもむろに立ち上がる一条、髪は乱れ、涙は垂れ、化粧は崩れ、まるで夜叉のようだ。夢心地から我に返った客の凄まじい拍手、その嵐の中をゆっくりゆっくり舞台奥に去る一条。さあ、ラスト曲オープンステージ、一条の再登場前から客席の拍手は凄まじい！軽く身繕いをして再びステージに現れた一条、一転して柔和な微笑み顔が実にチャーミング！客席所狭しと動き回る一条、ご開帳に及ぶとそこだけが周りの人を飲み込んでこぶのように盛り上がる。その現象が一条の移動に伴ってあちこちで起こる。後ろから見ていると客席が波のようにならっている。その波の去り際決まって客が観音様を拝むが如く両手を合わせている。その波が私の観ている後方にもやっとならって来た。人の頭でここまで全く見る事の出来なかった一条の襷が初めて目の前でご開帳される。手で大きく開かれた襷の奥から溢れるように出てくる自身の透明な愛液、それが陰毛をつたって落ちてくる。その一滴、一滴がカーボンで焚かれたピンスポットの青白い

光に当たるとまるでダイヤモンドの如くキラキラ輝きながら流れ落ちていく。美しい、実に美しい、まるで夜空の流れ星だ！猥褻感など微塵も感じられない、そう思った時には私も他の人同様に手を合わせ拜んでいた！そして一条の印象的な言葉「よう見える？こんなんでよかったらなんぼでも見てえ」優しさの究極ここに有り。今も私の脳裏に深く焼き付いている。奇しくも私が観た日の4日後、「1972年5月7日」警察の手が入った。おっと既に予定の字数を超えている。二度の出会いのエピソードは追悼公演の会場にて。